

## 第 17 回フィロロギカ研究集会

2018 年 10 月 13 (土) 13:00 より

於 成城大学 7 号館 1 階 7 1 3 教室 (控え室: 7 号館 1 階 7 1 4 教室)

プログラム (各発表時間は質疑応答の時間[10~15 分程度]を含む)

13:00 ~ 13:30

竹下哲文「Man. Astr. 5.604 と語源的あや」

13:30 ~ 14:10

平野智晴「「アルタイア物語」の変遷——ホメロスからソフォクレスまで——」  
(休憩5分)

14:15 ~ 15:00

吉田俊一郎「文彩を伴った模擬法廷弁論 *controversia figurata* について——大セネカ、クインティリアヌス、擬クインティリアヌス『小模擬弁論集』に共通するある主題の検討——」

15:00 ~ 15:45

河島思朗「オウイディウス『変身物語』第 4 巻 243 行 *enectum* について」

15:45 ~ 16:00 総会

(休憩 10 分)

16:10 ~ 17:10

大塚英樹「Cartesius infidelis?」

17:10 ~ 18:00

納富信留「アリストテレスのプラトン「イデア論」規定再考—『形而上学』A6, 987b7-10—」

18:00 ~ 20:00 懇親会

会場: 大学 7 号館地下ラウンジ

会費: 5,000 円 (学生 2,000 円) 程度の予定、当日申込み歓迎

## 発表要旨

Man. *Astr.* 5.604 と語源的あや

竹下哲文

占星術を題材として書かれたマールクス・マーニーリウスの教訓叙事詩『アストロノミカ』の第5巻は、黄道12宮とともに昇る星座 (paranatellonta) に関する記述がその大部分を占めている。そこでは、これらの星座から地上の人々に与えられる様々な気質や生業が、星座の由来・図像的イメージと結びつけながら描かれる。そしてその中には比較的有名であろうペルセウスとアンドロメダの小叙事詩も含まれている。

本発表では、この挿話の結びに近い部分、ペルセウスと海の怪物ケートゥスとの戦いを描いた詩行の一部を取り上げる。5.604 は写本の伝える読みが割れている (exstillat M: extollit GL) 箇所であり、19世紀の Jacob が M 写本の exstillat を採用した後、Housman もそれを認める判断をしている。しかし、1984年には Jones によって extollit の読みの方を支持すべきではないかという議論がおこなわれもした。Jones の案は広い支持を得るにはいたっていないが、その一方で Housman らの判断を引き継いでいる比較的最近の註釈・テキストもこの点に十分な検討を加えているとは思われない。

そこで、この行において exstillat/extollit の何が問題であるかをいま一度整理し、諸家の見解を確認した上で、この箇所に関してあまり顧みられてはいなかったマーニーリウスの表現方法、とりわけ (擬似) 語源的な含みを持たせた言葉づかいに着目して解釈を試みたい。結論的には、大方のテキストが行っているとおり M 写本の exstillat を採用することになるが、これまで充分に行われていなかったその判断の支持根拠を示すつもりである。

「アルタイア物語」の変遷——ホメロスからソフォクレスまで——

平野智晴

「アルタイア物語」は様々な時代の様々な詩作品において一種の神話的範例として採り上げられてきたが、その度に詩人たちの創意工夫により新たな文脈が作られていった。本報告ではホメロス、バッキュリデス、アイスキュロスにおけるこの文脈の変遷を概観し、ソフォクレスにおいてこれらが全て採り上げられ有機的に組み合わせられひとつの物語として完成したことを確認する。

ホメロスにおいて「アルタイア物語」は「リタイの寓話」によって導入される (Hom. *Il.* 9. 496-514)。すなわちフォイニクスは過ちを犯した人間が遅ればせに申し出る償いを後か

ら来る「祈願の女神たち Λιταί」になぞらえ、頑ななアキレウスにアガ멤ノンの償いを受けられるよう諫めるのである（502-12）。これに続いてフォイニクスはメレアグロスの戦線復帰までの経緯を物語る（524-605）が、いずれ戦場で死ぬことになる彼の定めが、同じく戦場で死ぬことになるアキレウスの定めをも暗示する。

バッキュリデスにおいて「アルタイア物語」は「禍福の瓶を踏まえた格言」によって導入される（B. 5. 50-5）。すなわち合唱詩人は被賞賛者たる僭主ヒエロンの病弱を念頭に、死すべき者である限り全てにおいて幸せであることはあり得ないと慰めるのである。冥界でヘラクレスと邂逅するメレアグロスは人間の身で神の意向を逸らすことは困難であると前置きをし（94-6）、母に呪われた自らの死を語る（136-154）。これによって結局のところ人間の運は（禍福の瓶をほしいままにする）神次第であることが印象付けられる。

アイスキュロスにおいて「アルタイア物語」は「世に恐ろしきものは多々あるが、人間の傲慢はより恐ろしく、女たちの非情な愛はさらに恐ろしい」（A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 585-602）というプリアメルを支える神話的範例の第一として挙げられている（603ff.）。ここで「愛ならぬ愛 ἀπέρωτος ἔρωσις」（600）はアルタイアが兄弟を殺された怒りで我を失ったことから「後先を顧みない激情」を意味する（607）とも、アルタイアが結果的にオイネウスとの間の子を殺してしまったことから「呪われた結婚／情愛」を意味する（625-6）とも考えられるが、いずれにしてもこれはアガ멤ノンもしくはアイギストスの破滅が暗示されているという点で、「禍福の瓶」の派生形たる「パンドラの瓶の神話」が意図されている。

ソフォクレスにおいてこの「パンドラ」を踏まえたプリアメルは三つのオードにわたって緊密に引き継がれている（S. *Ant.* 1<sup>st</sup> St. -3<sup>rd</sup> St.）が、ここに至って「アルタイア物語」はプリアメルに解消され姿を消す。しかし本劇において、2<sup>nd</sup> St. 冒頭（582）は「禍福の瓶」を、4<sup>th</sup> Eps. におけるテイレスシアスとコロスの台詞（1074-6, 1103-4）は「リタイ」を、それぞれ踏まえている。すなわち本劇の主人公の一人である「王」クレオンが、「傲慢にも」自らの法を神の法に優先させ譲らなかつたために、「遅れて来た禍い」として妻・息子を失うという「婚姻を巡る報い」を受ける、という物語の中に「アルタイア物語」によって創り出された全ての文脈が有機的に組み込まれているのである。

文彩を伴った模擬法廷弁論 *controversia figurata* について  
——大セネカ、クインティリアヌス、擬クインティリアヌス『小模擬弁論集』  
に共通するある主題の検討——

吉田俊一郎

文彩を伴った模擬法廷弁論 *controversia figurata* とは、法廷弁論を模して行われる模擬弁論 *controversia* のうち、弁論家が本当の意図を隠して、それと異なる（あるいは正反対の）

主張をしつつ、なお本当の意図が弁論から推し量られるように論じるものである。この種の弁論については、擬デメトリオス『文体論』を初めとしてギリシアの修辞学において一定量の考察が残されており、とりわけ擬ハリカルナッソスのディオニュシオスの『文彩を伴った弁論について』περὶ τῶν ἐσχηματισμένων λόγων と題された二つの小品が最も詳しい。一方でラテンの修辞学においては、この種の模擬弁論自体は見出されるものの、(模擬)弁論について「文彩を伴った」figuratus という表現は、クインティリアヌス『弁論家の教育』第9巻のある箇所(と、それに影響を受けた後代の著作)においてしか見出されず、また、この種の弁論についての体系立った考察もこの箇所がほぼ唯一のものと言ってよい。しかしながら、ここでこの種の模擬弁論の例として挙げられている主題の一つ(Quint. Inst. 9.2.90-91)は、大セネカの著作(Sen. Con. 2.3)と、擬クインティリアヌス『小模擬弁論集』(Quint. Decl. 349)にも現れるもので、それらにおけるこの主題についての考察は、クインティリアヌスと比較することが可能である。

本発表では、まずギリシア語の修辞学文献に見られる「文彩を伴った弁論」についての記述を概観し、それと比較しつつクインティリアヌスの考察を検討する。次にこれらを踏まえ、大セネカ、クインティリアヌス、『小模擬弁論集』に共通する模擬裁判弁論主題を取り上げ、各著作における分析を比較・検討する。これによって、「文彩を伴った弁論」というカテゴリーに対する明確な意識が希薄であったように思われるラテン修辞学において、この種の模擬弁論の扱い方がどう継続ないし変化していったのかという点の考察を試みたい。

#### オウィディウス『変身物語』第4巻243行 enectum について

河島思朗

オウィディウス『変身物語』第4巻243行の enectum には読みの問題がある。本発表はこの個所に提示されている校訂について再検討するとともに、新たな校訂案を提示することを目的とする。

第4巻1行以下では、ミニュアースの娘たちがバックスの祭儀に参加せずに機織りをしてしながら、順番に物語を話す。3人の姉妹がそれぞれ「ピューラムスとティスペーの物語」(55-166)、「レウコトエーとクリュティエーの物語」(167-270)、「サルマキスの物語」(271-388)を語る。243行は太陽神の恋を描いた「レウコトエーとクリュティエーの物語」に含まれる。レウコトエーが太陽神と交わりをもったことに怒った父親は、罰として彼女を生き埋めにして殺した。243-44行は、レウコトエーの死の場面を描く(nec tu iam poteris enectum pondere terrae / tollere, nympa, caput, corpusque exsanguie iacebas)。

主要写本においては、enectum が有力であり、この校訂を500年頃の文法家である Priscianus Caesariensis が伝えている。しかし、enectum について、喜劇では一般的に使わ

れる単語であるものの、オウィディウスにおける用例が極端に少ないことが問題視される。また、*enectum caput* と理解するときの詩的表現としての不適切さ、文法・用法上の課題など、いくつかの難がある。そのため、様々な議論がなされている。たとえば、Bömer (1976) や Barchiesi (2007) は *enectum* を積極的に解釈し、妥当性を検証しようとする。一方で、Burman (1727) は複数の校訂案を提示する。Harrison (1997) は *iniecto* を、Watt (1999) は *oneratum* を提示し、一定の支持を集めている。このような議論や提案がおこなわれるなか、近年に刊行された Anderson (1993) および Tarrant (2001) の校訂本は、疑わしいとしながらも、*enectum* を採用する。

本発表は各校訂案について再検討するとともに、新たな校訂案を提示したい。その際に、多くの研究者がこの2行のみに着目し新たな読みを示しているのに対して、本発表では「レウコトエーとクリュティエーの物語」全体（さらにはミニユアースの娘たちの3つの物語）に目を向け、物語の解釈と関連付けながら妥当だと思われる案を考察する。とりわけ、恋と眼差しの関係を取りあげ、「見ること」「見られること」がこの物語において特徴的に描かれることを重視する。太陽神はすべてを見る者として描かれ、その恋の在り方もまた見つめる眼差しに表される。同様にクリュティエーの強い恋心は眼差しの強さと関連付けられる。レウコトエーの死の場面は、そのような眼差しを持つ太陽神の恋の終わりを意味する。以上のような観点を提示しながら、当該箇所を議論する。

## Cartesius infidelis?

大塚英樹

*vel a sensibus, vel per sensus accipi* は「省察」冒頭に見られる表現である。Burman によれば、彼（当時20歳）がこれについて問うた際、Descartes（当時50歳）は *a sensibus* は *visu*、*per sensus* は *per auditum* であると答えたそうである（*Responsiones Renati des Cartes ad quasdam difficultates ex meditationibus eius, etc. ab ipso haustae*, VII, 18. 邦題「ビュルマンとの対話」）<sup>1</sup>。しかし、そのような意味がこのラテン語から出てくるはずはない（哲学者の多くはいまだこの答えを真に受けているが）。ではなぜ Descartes はこのようなデータラメを述べたのであろうか。またこの表現が本来意味するところは何だったのだろうか。本発表ではそれを考察する。またその他にもいくつか文献学的発見があったので、それも合わせて報告することにする。

---

<sup>1</sup> *Quidquid hactenus ut maxime verum admisi, vel a sensibus, vel per sensus accipi. A sensibus, videlicet visu, quo colores, figuras et similia omnia percepi; prater illum autem accipi reliqua per sensus, scilicet per auditum, quia ita a parentibus, praeceptoribus aliisque hominibus accipi et hausi ea quae scio.*

アリストテレスのプラトン「イデア論」規定再考  
—『形而上学』A6, 987b7-10—

納富信留

アリストテレスがプラトン哲学を正面から取り上げた『形而上学』A 卷第 6 章は「イデア論」理解の原点になる最重要箇所、哲学史への影響は計り知れない。だが、後世が依拠したその記述には、テキスト上数々の問題があり、現代に至るまで解釈も分かれている。二人の哲学者が対決する場面で何が起こっていたのかは、その解釈問題ゆえに、これまで霧の中にあった。

他方で、Oliver Primavesi が 2012 年に出版した A 卷の新たな校訂テキスト (Carlos Steel ed., *Aristotle's Metaphysics Alpha*, Oxford University Press 所収) は、これまで混乱がつづいていた写本系統の問題を見事に整理して、 $\alpha$  と  $\beta$  という二系統の関係について有効な仮説を提示している。その成果を受けて、もっとも問題となる 2 行 (987b7-9, 9-10) を再検討したい。

後者の文については、伝統的な  $\alpha$  系統の読みはこれまではそのままでは不可能な読みと見なされ、 $\beta$  系統の読みを採用するか (Bekker, Bonitz, Christ)、写本にはない改訂を加えるか (Ross, Jaeger) で、テキストが校訂されてきた。これに対して、私は  $\alpha$  系統の読みをそのまま理解する文法的・内容的可能性を提案する。その障害となってきた一つの点は、アレクサンドロスの注釈が  $\alpha$  の読みを知らなかった (完全に無視した) ことであるが、その点についても、なんらか事情の推察を加える。

この解釈によれば、アリストテレスはプラトンの語彙を生かしながら、自らの分析手段でプラトン・イデア論を定式化し、そこから本格的な批判を加えていった様子が見て取られる。今後の『形而上学』の翻訳・研究にも変化をもたらすはずである。本考察が、ごく限られた箇所の読みが、文献学の知見によって哲学の議論を大きく変える好例となることを期待している。